

第一章 岐阜まつりとその現況

第一節 岐阜まつりの概要

(一) 春の祭り、「岐阜まつり」

うらかな日差しに恵まれた春。年度も新たになった四月の岐阜の町は、まさに春祭りの季節である。この地を訪れた観光客も、また地元の人々も、口々に「岐阜まつり」のことを口にする。

ところが、ひと口に「岐阜まつり」とはいうものの、そのとらえどころは様ではない。人によって「岐阜まつり」の示す意味が異なるのである。

「岐阜まつり」という単語の示す意味の第一は「岐阜市における祭礼の日」という意味で、概ね各地の神社で行われる祭りである。明治二十二年（二八八九）以来、合併を何度も繰り返してきた岐阜市内は、当然、かつての村々だったところにはそれぞれの村社があり、そこでの信仰がまだ篤く残っていることがある。本来は「どこどここの春祭り」と呼んでいたものが、岐阜市域への合併があり、また、祭礼日も、もともとは何月何日とそれぞれいろいろあったのが「四月の第一土日曜日」とされてしまうと、単なる「岐阜まつり」と名を変えてしまうこともある。

第二は市内の伊奈波神社の春季祭礼のことである。次第は後で詳しく述べるが、神幸祭や山車奉曳、からくり奉納、神輿奉納、宵宮などの神事・行事である。同時期に開催される道三まつり（NHKの大河ドラマに端を発する商業祭。岐阜商工会議所をはじめ商店街振興組合や青年会議所などの諸団体、岐阜市までもが名を連ねる実行委員会の主催で、今でも岐阜駅前や柳ヶ瀬通りなど、いわゆる市の目抜き通りは多くの人で賑わう）があ

るが、「岐阜まつり協賛 道三まつり」とパンフレットで述べているように、「岐阜まつり」は道三まつりに協賛するものとして別物に扱っている。また同じパンフレットに「岐阜まつり 宵宮」、つまり伊奈波神社のまつりが「岐阜まつり」となるわけである。

これで収まっていればよかったのだが、昭和四十八年（一九七三）に始まった道三まつりは期日を伊奈波神社の祭礼と同じにしたため、本来は異なる両者のまつりが融合したかのような場面もあった。神社の神事かそうでないか、容易に判断がつかい兼ねることもままある。今日でいえば、道三まつりの神輿パレードの中で、伊奈波神社の神幸祭の行列がおこなわれる、というようなことである。今できの神輿隊の後ろに伝統的な衣装を身につけた者が続く、などという光景は、識者の中には眉をひそめたくなるようであるが、一般見物者の中には何とも感じない人もいることだろう。つまりは、伊奈波神社の祭礼日に合わせて、伊奈波神社でおこなわれる神事のみならず、神事に関係ないことまで含めた賑わいを「岐阜まつり」と呼ぶ。これが第三の「岐阜まつり」である。

今回の調査は「岐阜まつり総合調査」で、報告書は「岐阜まつり総合調査報告書」である。また、平成三十年度の岐阜市重要無形民俗文化財に指定されたのは「伊奈波神社祭礼に伴う岐阜まつり行事」であり、この「岐阜まつり」とは「伊奈波神社例祭に係る一連の祭礼行事と、岐阜まつり中の伊奈波神社に係る行事」を指す。すなわち本調査、ならび本調査報告書で取り扱う岐阜まつりとは、第二の意味合いである。この点、紛らわしいが、ここに違いを述べておく。

(二) 岐阜まつりの構成

まず、「伊奈波神社例祭に係る一連の祭礼行事」を見てみよう。令和六年



(二〇二四)の例祭次第を見ると、四月五日(金)におこなわれる例祭、六日(土)におこなわれる神幸祭(発幸と帰着)と宵宮^{よみや}が挙がっている。神幸祭については次節で述べる。宵宮の中には山車曳出、神輿奉納、岐阜神輿連、仕掛花火が名を連ねている。

このうち岐阜神輿連は伊奈波神社本来の祭礼行事かといえ、そうではない。岐阜まつりに登場する御輿には二系統あり、そのひとつが本造町が持っている本神輿である。これは天保年間以来の仕事を感じさせる本格的な造作で、市の重要有形民俗文化財にも指定されている。これについては本章第三節(二)、および第六章を参照いただきたい。それが神前に奉納されるのが神輿奉納で、こちらは伊奈波神社本来の祭礼行事に数えてよいと思われる。

今ひとつは造り神輿と呼ばれるもので、明治年間の日露戦争戦勝記念の年あたりから起こった、比較的新しい、時流を反芻させたものである。伊奈波神社の祭礼に来る人は、神輿を持っているところの人はよいものの、神輿を持たない人々は祭礼が楽しめない。であれば、そういった人々が、新しく神輿を作って祭礼に参加する動きが出てくる。もちろん、明治の頃のもの、今、担いでいるわけではないが、その流れが、現代にも通じているのであろう、現代おこなわれている神輿パレードの源流ともいえる。その中枢をなすのが岐阜神輿連であり、そこから七基(令和六年)が宵宮に参加している。

仕掛花火は伊奈波神社の主催で、昔ながらの祭礼行事に入っている。

また、話は前後するが、宵宮がおこなわれる日、伊奈波神社境内ではなく各町内では、山車の曳行がおこなわれる。山車は現在、四台ある。安宅車、清影車、若戎車、踊車で、これらは岐阜市の重要有形民俗文化財に指定されている。このうち踊車は町内によって支えられているわけではない

め、町内曳行はおこなわないが、残り三者はそれぞれの町内の辻々でからくりの披露をするともに、町内を練り歩く。いずれもお囃子を奏でながらの曳行であるが、その音色には子どもたちの参加もあるから、大人も子どもも入り混じっての行進となる。

そのほかには奉告祭がある。これは山車の清め払いで、三月下旬の日曜日におこなわれる。伊奈波神社の春の祭礼が始まる合図みたいなものである。岐阜まつりには四台の山車が登場し、各町内を練り歩く。その山車の特徴もまちまちで、様子を語るのも面白いのであるが、それらが行く行程がまた通り一遍で語れるものではなく、実に興味深い動きをする。これらについては次々節で述べる。

次に「岐阜まつり中の伊奈波神社に関連する行事」であるが、先に述べた岐阜神輿連の活動がそれにあたる。

(三) 岐阜まつりの期日と行事の進行次第

岐阜まつりの期日は年によって異なる。元来、伊奈波神社の祭礼日は三月三日とされていたが、新暦が導入された明治六年(一八七三)、四月五日(四日は神幸祭と宵宮)に改められた。合わせて岐阜市に合併された町や村の祭礼日も四月五日となった。昭和四十年頃になると、伊奈波神社の祭礼以外は四月の第一土・日曜日へと変更された。これが続いていたが、平成八年(一九九六)、岐阜商工会議所や岐阜市観光協会からの要請に対し伊奈波神社が折れる形で祭礼を二分割し、例祭は四月五日におこない、神幸祭や宵宮など試楽祭に相当する部分を四月の第一土曜日と翌日曜日におこなうようになった。

加えて令和元年からのコロナ禍によってまつりの開催自体に困難が生じ、期日が便宜的に変えられたりもした。そこでここではコロナ禍に騒ぐ



写真 1-2 例祭（式典前の整列）
（令和四年四月五日）



写真 1-1 例祭
（令和四年四月五日）



写真 1-4 例祭（黒龍神社前の式典）
（令和四年四月五日）



写真 1-3 例祭（本殿での祝詞奏上）
（令和四年四月五日）



以前の平成三十年（二〇一八）を例に、まつりの期日とそこでなされる行事の実態について述べる。

四月第一土曜の一週間前の日曜日（平成三十年四月一日）

奉告祭がおこなわれる。この日、伊奈波神社から宮司が出て、それぞれの山車ごとに時間を変えて、山車蔵前でお祓いをする。この日から、各山車は祭礼の準備をする。

四月第一土曜の前日（平成三十年四月六日）

山車二台（安宅車と清影車）が会所に運ばれ、会所の設営や山車の飾り付けなどの準備をおこなう。

四月四日

前夜祭で、夕方から伊奈波神社でお祓い、祝詞、神楽、玉串奉納などがおこなわれる。

四月五日

例祭で、午前中、伊奈波神社でお祓い、祝詞、神楽、玉串奉納などがおこなわれる。

四月第一土曜（平成三十年四月七日）

伊奈波神社では神幸祭（正確には午前中に発輦祭、午後になつての神幸祭、還幸祭に分かれる）がおこなわれる。夜は宵宮で神社への人だかりはおさまらず、山車や神輿のお祓いなどをする。一方町衆では、三台の山車がそれぞれの行程を行き、各所であらうの披露がおこなわれる。また夜は宵宮で、伊奈波神社に集まり、神社のお祓いを受けた後、あらうの披露をおこなう。

四月第一土曜の翌日（平成三十年四月八日）

山車の片付けである。安宅車と清影車は町内各所であらうを披露しつつ伊奈波神社の蔵へと戻り、若戎車は町内の奉曳はなく伊奈波神社

の蔵前に到着し、正午過ぎまでに片付けを終える。

ただしこれはあくまでも平成三十年の事例である。伊奈波神社の例祭は毎年変わらずなされているのに対し、岐阜まつりの期日は年によって異なってくる。またコロナの影響で、まつりの内容が変わってしまったことも否めない。今後、祭りも復活してくるものと思われるが、それがコロナ禍以前の様子に戻るかどうかは、実は誰にもわからない。それは期日だけでなく、まつりそのものについても同様である。

第二節 伊奈波神社の神事

(一) 伊奈波神社の祭神と岐阜まつり

伊奈波神社は垂仁天皇の第一皇子、五十瓊敷入彦命いにしきいりひこのみことを主祭神として祀る。社伝によれば、五十瓊敷入彦命は朝廷の命により奥州を平定した。この功から土地の開拓神として名を高め、やがては農耕の神となった。しかしその成功を妬んだ陸奥守の諫言により、朝敵とされて、この地で討たれたという。

妃である淳熨斗姫命ぬのしひめのみこと（景行天皇の第六皇女）がこの地を訪れ、五十瓊敷入彦命を慰霊しつつ生涯を終える。妃神を祀っているのが金神社で、御旅所のひとつである。妃は私財を投じて町の発展に寄与したこと、後から「財をもたらず神」として祀られるようになったといい、そこから「金大神」と呼ばれて信仰されるようになったといわれる。

五十瓊敷入彦命と淳熨斗姫命の間の子が市隼雄命いちはやおのみことである。檀森神社の祭神で、安産祈願、夫婦和合、子どもの守り神として信仰されている。

岐阜まつりは伊奈波神社を主舞台としているが、その妃を祀る金神社や子を祀る檀森神社が神幸祭（御旅所祭）の場として重要である。三つの神社の祭神には、このような関係がある。

(二) 前夜祭と例祭

毎年、四月四日が前夜祭、四月五日が例祭に当たっている。祭礼日が今のように四月の第一土曜になる前からの慣習である。ともにお祓い、祝詞、神楽、玉串奉納などがおこなわれるが、前夜祭は、翌日に例祭をおこなうことを神に告げるもので、定型的なことを形式通りにおこなう。よって、時間も短く、せいぜい三十分程度である。

対して例祭は本祭日であって、賓客も地元の総代であったり、また伊奈波神社に関わりの深い神社の宮司など、さまざまな者に声がかかる。このため時間も二時間を超えることもある。

(三) 神幸祭次第

神幸祭（広義と狭義）

広義の神幸祭とは伊奈波神社の神・五十瓊敷入彦命の御魂を輿に移して（発輦祭）、金神社、檀森神社などの御旅所を渡御し（狭義・神幸祭）、再び帰ってくる（還幸祭）ことをいう。正しくは、午前中におこなわれる発輦祭、午後になつておこなわれる神幸祭（狭義）、夕方におこなわれる還幸祭からなっている。このうち発輦祭は昭和三十五年（一九六〇）に始められたもので、昔ながらの純然たる神事というわけでもない。

狭義・神幸祭は、場所が良長橋通でおこなわれる。付近は道三まつりに参加する神輿パレードの真つ最中である。プロの司会者が賑やかに進行し、神輿とそれの見物人たちで、非常に賑わしい限りであるが、その中の決まった時間、神幸祭がおこなわれることは、あらかじめ報じてある。一四時を挟んで前後の三十分は、伊奈波神社からの行幸が金神社での御旅所祭を終え、檀森神社と合わせての三社合同祭典があり、檀森神社での御旅所祭へと出かける途上である。神幸祭が始まったことが知らされると、神輿を担う者たちは静かになる。ざわめきが収まって先ほどまで騒ぎ切っていたその場が、急に静かになる。その中を、古風な衣装をつけた行幸の者たちが、静々と歩を進めてゆく。一種、独特の感がある。

令和五年のスケジュールに沿って見てみる。なお、北野神社は隔年で渡御しており、当年は渡御の年にあたっている。



発輦祭

一〇時二〇分

手水の儀 関係者が手水にて手洗いする。

神職が宮司に一礼し、先頭に立って本殿に移動開始する。

順番は、権禰宜（青色の装束）、宮司（黒色の装束）、禰宜（赤色の装束）、権禰宜。

修祓 神職二人がそれぞれ榊と塩湯を持って、お祓いする。

宮司一拝 宮司に合わせて神職が祭神に一礼。

宮司御扉開扉 宮司が本殿御扉へ進み扉を開ける。その間、扉を開け終わるまで神職が「オー、オー、オー」と警蹕を

発声する。宮司が扉を開けた後、御簾を上げる。

献饌 神職が神饌を供える。

祝詞奏上 宮司が案の前に移動し、祝詞を奏上する。

玉串奉典 宮司が案に玉串を供え、拝礼する。それに合わ

せ、神職も拝礼する。

撤饌 神職が神饌を下げる。

出御 宮司と神職が本殿へ移動し、本殿前で一礼する。

宮司が本殿に入り、御霊を箱に遷す。

宮司が御霊を遷した箱を持って、本殿から下りる。

神職が御簾を垂らす。

神職が先頭に立ち、榊を振り、警蹕を発声しながら先導を務める。鳳輦に向かう。順番は、神職（先導）、宮司（箱持ち）、

神職、神職二名。

鳳輦に箱を移し、終了する。

一〇時四六分

神幸祭

一一時四五分

手水の儀 関係者が手水にて手洗いをする。その後、太鼓

橋前に奉安してある鳳輦の前に整列する。

神社関係者が手水にて手洗いする。

神社関係者が鳳輦の前に整列。

修祓 神職によるお祓い。

宮司による玉串奉典

一二時二五分

神幸行列が伊奈波神社前を出発する。並び順は以下のとおり。

神職

社名旗

猿田彦

獅子

伶人

太鼓持ち

五色旗

神職

四神のうちの二神旗（朱雀、青龍）

神職

鳳輦

神職

四神のうちの二神旗（玄武、白虎）

宮司

責任役員、氏子総代

稚児

巫女四名

神職

一二時三〇分 広場にて鳳輦を儀装車に積み込む。一行もバスに乘車する。

一二時三九分 神幸行列が伊奈波神社を出発する。

一二時四二分 神幸行列が「矢島町1」交差点を通過する。

一二時四五分 神幸行列が「今小町」交差点を通過する。

一二時四八分 神幸行列が「裁判所前」交差点を通過する。

一二時五四分 神幸行列が「金町5」交差点過ぎの交差点を左折する。

一二時五五分 神幸行列が金神社前に到着する。

儀装車が金神社の鳥居前に到着し、鳳輦を下ろす。神幸行列と鳳輦が金神社境内へ入る。

神幸行列・金神社関係者が本殿前に鳳輦を並べて整列する。

「金神社の御旅所祭」

一二時〇二分 宮司対揖 伊奈波神社と金神社宮司が向かい合い互いに一礼する。

修祓 金神社神職が伊奈波神社神職、金神社神職、神幸行列関係者を櫛でお祓いする。

宮司一拝 伊奈波神社宮司に合わせ、一同鳳輦に一礼する。

一二時〇七分 献饌 金神社神職が神饌を供える。

一二時一分 祝詞奏上 伊奈波神社宮司が祝詞を奏上する。

一二時一五分 神楽奉奏 伊奈波神社巫女による、櫛乃舞（二人舞）、速神楽（四人舞）を奉奏する。

一二時二〇分 玉串奉典 伊奈波神社宮司に合わせ、伊奈波神社関係者が拝礼する。

金神社宮司に合わせ、金神社関係者が拝礼する。

一二時二三分 撤饌 金神社神職が神饌を下げる。

一三時二七分

宮司一拝 伊奈波神社宮司に合わせ、一同鳳輦に一礼する。宮司対揖 両神社宮司が一礼する。

伊奈波神社の神職と関係者が金神社本殿内に移動する。

伊奈波神社宮司に合わせ、一同二礼二拍手一礼にて拝礼する。

金神社での御旅所祭が終了する。

一三時三〇分

伊奈波神社の神幸行列が金神社鳥居から徒歩で出発する。隊列は先と同じ。伊奈波神社の神幸行列に続き、金神社の神幸行列が続く。金神社南東角を右折し、次の交差点を左折。

神幸行列が長良橋通りに出たところで榎森神社神幸行列と合流。伊奈波神社、金神社、榎森神社の順で長良橋通りを北進する。

「三社合同祭典」

一三時五二分

「神田町4」交差点付近で三社が整列。東から西に榎森神社、伊奈波神社、金神社。

修祓 伊奈波神社神職が祝詞を奏上する。その後、金神社神職が櫛を持って、観衆にお祓いをする（東側→西側）。

伊奈波神社巫女四人が神楽を奉奏する（速神楽）。その後、鈴祓い。

玉串奉典 三社宮司の拝礼に合わせ観衆も拝礼する。

合同祭典が終了する。

神幸行列、徒歩で長良橋通りを北進開始。金神社、榎森神社の神幸行列が続く。

伊奈波神社と榎森神社の神幸行列が「神田町3」交差点を東に、金神社の神幸行列が西に曲がる。

神幸行列が榎森神社に到着する。

一四時一分



「檀森神社の御旅所祭」

一四時二〇分	宮司対揖 伊奈波神社宮司と檀森神社宮司が、向かい合い互いに一礼する。	一五時〇四分	「金町2」交差点を左折して若宮町通りを西進する。
	修祓 檀森神社神職が伊奈波神社神職、檀森神社神職、神幸行列関係者を榊でお祓いする。	一五時〇五分	「若宮町7」交差点を左折して北進する。
	宮司一拝 伊奈波神社宮司に合わせ、一同鳳輦に一礼する。	一五時〇七分	菅原町二丁目の交差点を左折して西進する。
	献饌 檀森神社神職が鳳輦前に神饌を供える。	一五時一三分	北野神社にて、伊奈波神社神職による修祓、宮司による玉串奉典を行う。
一四時二六分	祝詞奏上 伊奈波神社宮司が祝詞を奏上する。	一五時一九分	神幸行列が北野神社を出発。
一四時三〇分	神樂奉奏 伊奈波神社巫女二人が榊乃舞（二人舞）、速神樂（四人舞）を奉奏する。	一五時二一分	「真砂町5」交差点を左折して南進する。
		一五時二二分	「本郷町1」交差点を右折して西進する。
一四時三四分	玉串奉典 伊奈波神社宮司、檀森神社宮司、檀森神社氏子二名の順に行う。	一五時二五分	赤口神社にて、伊奈波神社神職による修祓、宮司による玉串奉典を行う。
一四時四一分	撤饌 檀森神社神職が神饌を下げる。		神幸行列が赤口神社を出発。若宮町通りを西進する。
一四時四四分	宮司一拝 伊奈波神社宮司に合わせ一同拝礼する。	一五時三五分	「都通1」交差点を右折し北進する。以下、「大縄場大橋東」
	宮司対揖 伊奈波神社宮司と檀森神社宮司が、向かい合い互いに一礼する。	一五時三七分	交差点を右折した後、「西野町7」交差点と「真砂町3」
	伊奈波神社の神職と関係者が本殿内に移動する。		交差点を西に直進し、「今小町」交差点で左折して北進、「本町3」交差点、「本町1」交差点を経由して「岐阜公園前」
	伊奈波神社宮司に合わせ、一同二礼二拍手一礼にて拝礼する。		交差点を右折して南進、靱屋町の交差点を左折して南進し、
	檀森神社の御旅所祭が終了する。		「伊奈波通1」交差点を左折して東進する。
「北野神社・赤口神社の渡御」		一六時一〇分	参集殿前に鳳輦を載せた儀装車が到着する。
一四時四八分	神幸行列の威儀物や釣り太鼓、鳳輦などを儀装車に積み込む。	一六時一三分	鳳輦を降ろし、太鼓橋の前に奉安する。一同が鳳輦前に整列する。
一四時五九分	鳳輦が檀森神社の鳥居前を出発する。		
一五時〇三分	神幸行列が「金園町3」交差点を右折する。	一六時一六分	宮司一拝 宮司が鳳輦の前に移動し、鳳輦に一礼する。神職と関係者も合わせて一礼する。
	神幸行列が「金町5」交差点を右折して金華橋通りを北進		



写真 1-6 発輦祭（令和五年四月一日）
鳳輦に箱を移す



写真 1-5 発輦祭開始（令和五年四月一日）
権禰宜、宮司、禰宜、権禰宜の順に本殿に移動



写真 1-8 神幸祭（金神社での御旅所祭（令和五年四月一日）
伊奈波神社と金神社、両宮司の対揖



写真 1-7 神幸祭（令和六年四月六日）
伊奈波神社を出立



写真 1-10 神幸祭（令和五年四月一日）
三社の宮司による玉串奉典
（伊奈波神社所蔵）



写真 1-9 神幸祭（令和五年四月一日）
神田町 4 交差点付近で三社が合同で祭典を行う



写真 1-12 神幸祭（榎森神社での神楽奉納）
（令和六年四月六日）



写真 1-11 神幸祭（榎森神社での御旅所祭）
（令和六年四月六日）



写真 1-14 神幸祭（赤口神社での御旅所祭）
（令和五年四月一日）



写真 1-13 神幸祭（北野神社での御旅所祭）
（令和五年四月一日）



写真 1-16 神幸祭（令和五年四月一日）
宮司が鳳輦に一礼後、参加者にあいさつして終わる



写真 1-15 儀装車に乗せて移動する鳳輦
（令和五年四月一日）

神幸行列参加者にあいさつをする。その後、宮司と神職三人を残して参加者は解散する。

一九時〇〇分

還幸祭

一六時一八分

神職が鳳輦を開け、御霊を遷した箱を取り出す。宮司と神職三人が本殿に移動を始める。

一六時二二分

神職が本殿内神座に「お遷し」を行う。
本殿内の御簾を上げる。

一九時三〇分

献饌 神職が神饌を供える。

祝詞奏上 宮司が祝詞を奏上する。

玉串奉典 宮司が案に玉串を供え、拝礼する。それに合わせ、神職も拝礼する。

撤饌 神職が神饌を下げる。

御扉閉扉 宮司が扉を閉める。その間、神職が警蹕を発声する。

二〇時一五分

一六時三七分

宮司一拝 宮司の一礼に合わせて神職も一礼する。
宮司、神職が本殿から退出して還幸祭が終了する。
関係者は解散する。

二〇時四五分

来賓紹介。岐阜市長と伊奈波神社宮司による挨拶。
各神輿の代表がステージ前に集まり、神輿の表彰が行われる。

(四) 宵宮次第

宵宮は、山車や神輿を神社へ練り込む夜の祭礼である。宵宮実行委員会の主

二二時〇〇分

導のもと、神賑わいの行事が進められる。

ここでは、平成三十年（二〇一八）の記録から留めておく。

一八時〇〇分

一八時〇五分

宵宮が始まる。実行委員長がステージにて挨拶する。
高富青雲組が太鼓の演奏をする。

なお、令和七年の宵宮では、太鼓の演奏を県立岐阜総合学園高等学校太鼓部が実施している。また、神輿の練り込みは、岐阜睦、木造「町神輿」、岐阜祭粋會、（松阪太鼓）、神輿愛好会、神加勢、岐阜心女、金華神輿の順に行われた。

神輿は木造町に、四台の山車は伊奈波通にて待機する。
山車が宵宮の会場へ入ってくる。司会者は各山車の説明をする。山車は踊車を先頭に入場し（これは毎年、決まっている）、神社のお祓いを受けて、所定の位置に着く。残り三台がこれに続く（入場順は年により異なる）。
神輿が伊奈波通にて練り込みをしながら宵宮会場を目指す。
神輿が宵宮の会場へ、順次入ってくる。司会者は各神輿の説明をする。

神輿が木遣唄にのって来る。この年は、金神社奉賛会 岐阜睦（以下、「岐阜睦」、ぎふ青年神輿、岐阜祭粋會、松阪みこし、松阪太鼓、神輿愛好会、加納天満宮神輿會、神加勢（以下、「神加勢」、女神輿、岐阜心女（以下、「岐阜心女」、木造「町神輿」、金華神輿の十基が出た。

全神輿の総練り後、岐阜市長、伊奈波神社宮司、宵宮実行委員長、神輿連会長でこれらの神輿を総評する。

山車のからくりが奉芸される。各山車ごとに、からくりの説明がされる。

仕掛火花が奉納される。

宵宮が終了する。山車や神輿が退場する。

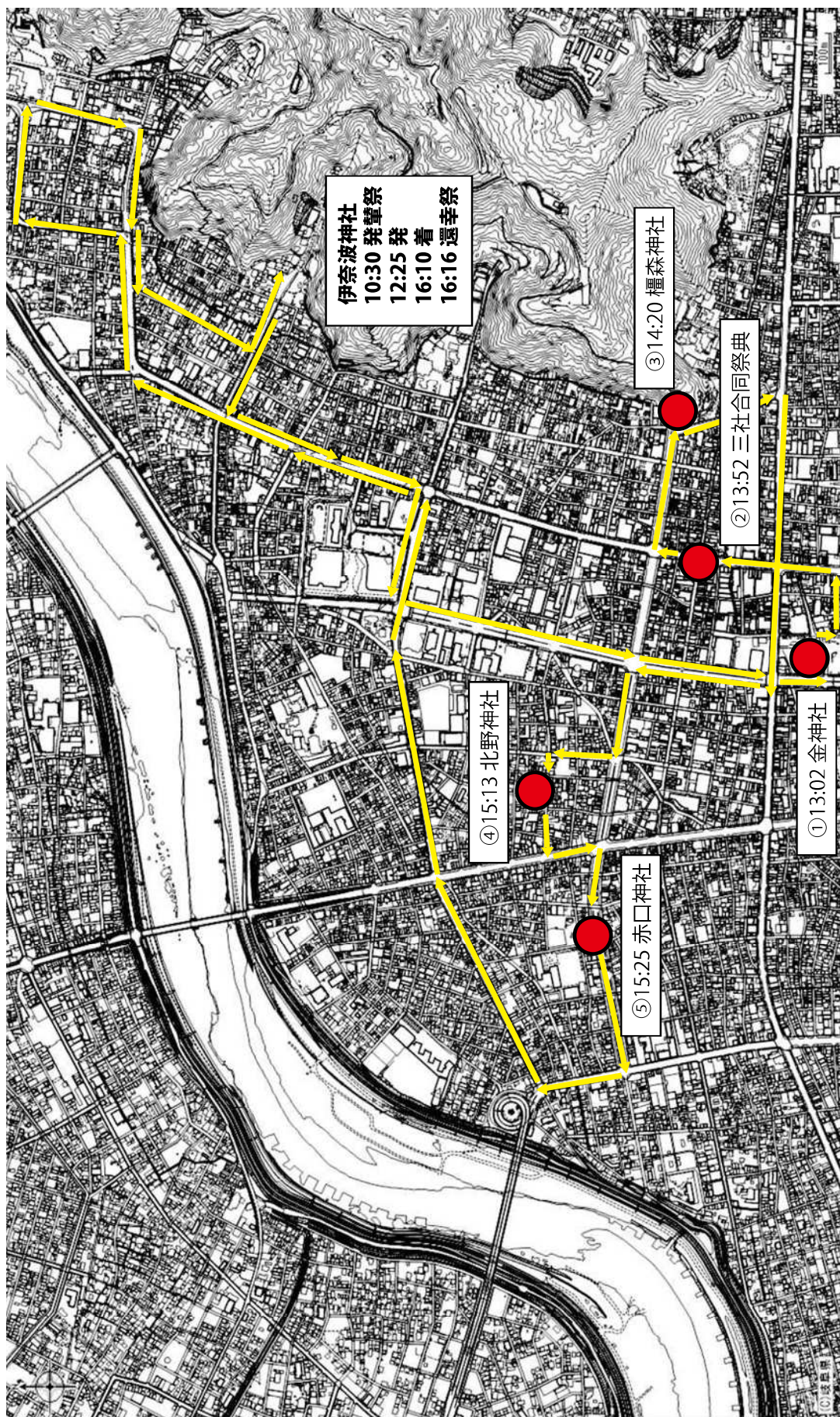


図 1-1 神幸祭 順路（令和五年四月一日）



写真 1-18 宵宮の安宅車（令和五年四月一日）



写真 1-17 宵宮の踊車（令和七年四月五日）
（伊奈波神社所蔵）



写真 1-20 宵宮の清影車（令和五年四月一日）
（伊奈波神社所蔵）



写真 1-19 宵宮の若戎車（令和六年四月六日）
（伊奈波神社所蔵）



写真 1-22 宵宮の岐阜心女会の後ろに木造町町神輿
（平成二十九年四月一日）



写真 1-21 宵宮の木造町の町神輿
（平成二十九年四月一日）



第三節 山車奉曳、神輿奉納、その他

(一) 山車奉曳 各種の山車

古くはもともとたくさんの山車があったというが、現在、岐阜まつりで出される山車は、安宅車、清影車、若戎車、踊車の四台ある。このうち踊車は町内によって支えられているわけでないため、町内曳行はおこなわないが、残り三者はそれぞれの町内の辻々でからくりの披露をするともに、町内を練り歩く。いずれもお囃子を奏でながらの曳行であるが、その音色には子どもたちの参加もあるから、大人も子どもも入り混じっての行進となる。

山車は、本来は伊奈波神社のものではなかったが、各町内からの意向で伊奈波神社に寄付され、同社の所有となった。

安宅車

名古屋型の人形山。運営は金華地区と安宅車奉曳支援会で、山車曳行は金華地区を十六地区に分け、うち二地区が担当して次へ回す輪番制である。からくりは幣振り人形のほか、弁慶人形・義経人形で、能「安宅」が奉納される。

山車については、地元では次のようないい伝えが残っている。元は上今町が所有していた山車である。弘化元年（一八四四）の作で、明治二十一年（一八八八）の改修の時からからくりが設置されて人形山となった。

昭和三十三年（一九五八）、岐阜市重要有形民俗文化財として、安宅車とからくり人形三体が指定される。

若戎車（蛭子車）

名古屋型の人形山。四台の中では最も古い。運営は岐阜若戎車奉曳会で、山車曳行は明郷校区を中心に曳き手を毎年募集している。からくりは采振り（唐子）と若恵比寿で、能「岩船」の一部を取り入れた演目が奉納される。

采振りは享和二年（一八〇二）、若恵比寿は嘉永五年（一八五二）の作で、両人形とも、平成三年（一九九一）に修復された。

山車については、地元では次のようないい伝えが残っている。元々は加納本町三丁目が所有する山車で、加納天満宮の祭礼で曳かれていたが、濃尾震災で加納天満宮の祭礼が縮小され、金屋町に売却された。その後も、加納天満宮の祭礼には曳き出された。製作は享和二年（一八〇二）である。

昭和五十四年（一九七九）、岐阜市重要有形民俗文化財として指定される。

清影車

名古屋型の人形山。運営は京町地区と清影車からくり保存会で、山車曳行は京町地区を七つに分け、うち一地区が担当して次へ回す輪番制である。からくりは采振り（前人形）のほか、彦火火出見尊（大人形）と豊玉姫（龍神）で、能「玉ノ井」が奉納される。ただこれは、元々の人形は昭和三十四年（一九五九）の伊勢湾台風で損傷し、以後、所在がわからなくなってしまったため、平成九年（一九九七）、伊奈波神社の板絵をもとに復元したものである。

山車については、地元では次のようないい伝えが残っている。元は湊町、もしくは湊町、玉井町、本浜町の三町が所有していた山車である。製作は江戸末期ともいわれる。明治二十四年（一八九一）、濃尾震災でからくり以外のものは焼失し、大正年間に復元された。

昭和五十四年（一九七九）、岐阜市重要有形民俗文化財として指定される。

踊車

他の三台とは異なり、二階部が高欄付きの舞台形式になったもの。運営はボリースカウト岐阜第十六団で、山車曳行はおこなわない。

伊奈波神社で四台が並ぶ時は、一番初めに曳き出される。平成元年（一九八九）頃、伊奈波神社神賑会という団体から譲り受けた。

山車については、元は矢島町が所有していた山車で、舞台上で踊りを踊っ

た、とも、小熊町の所有していた山車で、台車部分を残して焼失したものを、簡素な山を組み、からくり出しの副山車として子どもや荷物を乗せて回った、とも伝えられている。

昭和五十四年（一九七九）、岐阜市重要有形民俗文化財として指定される。

山車の奉曳

四月第一土曜の一週間前の日曜日から各山車は祭礼の準備が始まる。町内が山車を保有していない踊車を除くと、第一土曜には朝、会所で儀式をおこなった後、町内を練り歩き、夜には宵宮がおこなわれる。ここでは各町内における山車の曳行について述べたいのであるが、これがなかなか容易ではない。

例えば安宅車であるが、この山車は金華地区十六に分け、うち二地区が今年の当番となる。この地区は決まった曳行順路があり、それにしたがって山車を曳行する。ところがその翌年になると異なる二地区が当番となり、前年の担当地区とは異なった地区を、異なった順路で山車が通る。会所も変わる。単純計算をすると、山車が今年と同じところを巡行するのは八年後ということになる。

清影車も同様である。こちらは七地区の輪番制であるから、順路の数は七通りある。

このように、岐阜まつりの山車曳行といってもその巡行過程は年によって違い、三つの山車がそれぞれ同じ順路を通ることは何十年も先のことといえる。いや、経路が同じであっても会所の場所が変わることもあるし、会所まで同じであってもからくりの奉納をおこなう場所が違ったりする。こうなると、三つの山車がまったく同じ順路を行くなどということは、確率的に皆無に近い。

山車曳行の隊列の組み方は、平成三十年（二〇一八）の安宅車の場合を

次に記す。

先導高張提灯

奉曳先導（実行委員長）（笠と袴）

相談役（略礼服）

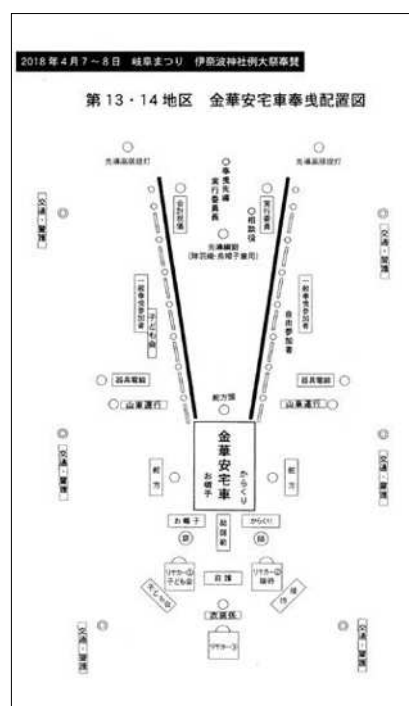


図 1-2 安宅車奉曳配置図

先導綱割（烏帽子と赤陣羽織）

舵方頭（舵方Ⅱ車力用半纏とパッチ、地下足袋）

采振り（宵宮のみ）（専用衣装）

金華安宅車、周囲には舵方（舵方用半纏とパッチ、地下足袋）

囃子師匠（指導者Ⅱ後藤嘉津幸氏、林良一氏、川村陽一朗氏）（着物、白足袋、草履・からくり師匠（指導者Ⅱ高森誠三氏）（からくり衣装）

衣装係

全体の周囲に交通・警護（蛍光ベスト、ジャンパー）

清影車、若戎車も隊列にはそれぞれ決まりがあつて、その組み方を書いておく。

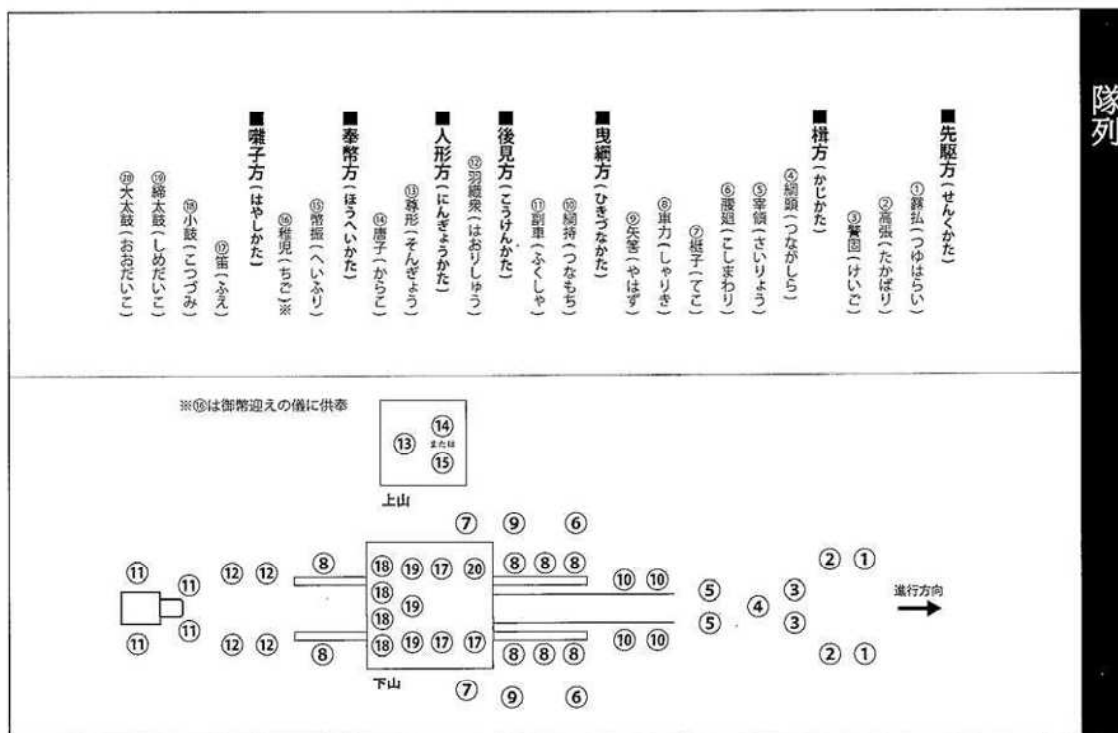


図 1-3 若戎車奉曳配置図

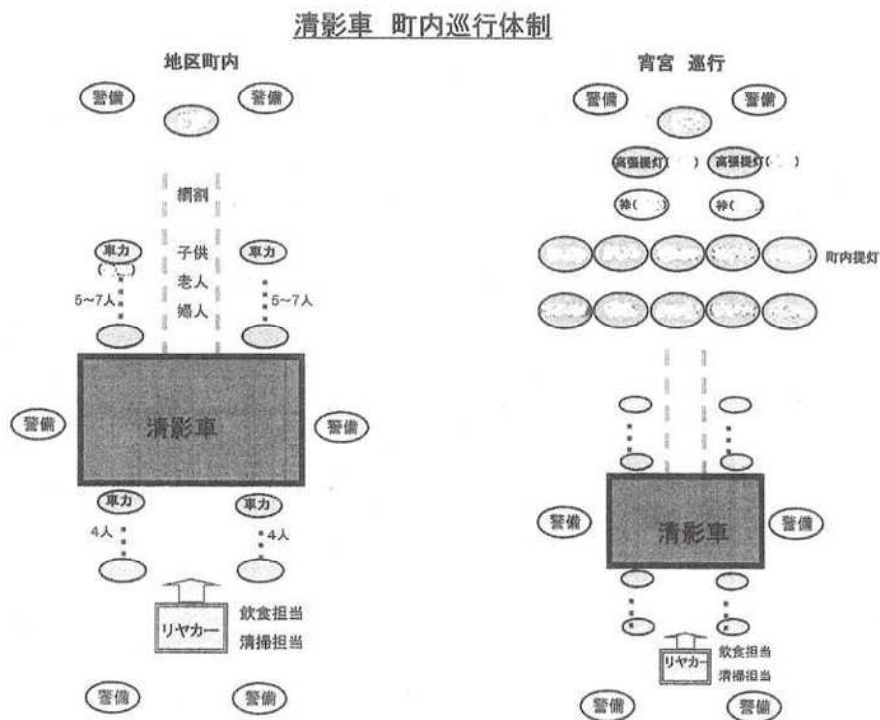


図 1-4 清影車奉曳配置図



写真 1-24 町内でからくり披露する清影車
(平成三十年四月八日)



写真 1-23 出立して山車巡行が始まる
(平成二十九年四月一日)



写真 1-26 山車巡行(安宅車)
(平成三十年四月八日)



写真 1-25 伊奈波神社に着いた若戎車
(平成三十年四月八日)



写真 1-28 山車を蔵に片付ける
(平成二十九年四月二日)



写真 1-27 山車巡行の途中、葛の神輿と出会う
(平成二十九年四月一日)



囃子

山車はいずれも曳行の際、音楽が流れる。これは囃子と呼ばれるもので、各山車ごとに準備される。囃子方は山車に乗り込んで演奏し、それゆえ、囃子は山車の中から聞こえて来る。囃子の内容については第八章をご覧ください。

さて、囃子の準備も各山車ごとに違い、また、巡行の当番に当たった組がおこなう。したがって笛や太鼓を演奏する者は、昨年とは違う。経験があるといっても七ないしは八年前のことであるから、手慣れているといっても毎年演奏するわけではない。毎年、一月下旬から二月中旬ともなれば、各町内でお囃子の練習会がおこなわれている。

以下は令和六年（二〇二四）の囃子の練習風景からである。

安宅車

練習場所は金華公民館である。

演者は、当初は輪番制を取っていたが、最近子どもが少なかったため、他地区の子どもも受け入れている。指導者は能楽師の後藤嘉津幸氏で、締め太鼓と大太鼓を子ども、笛と鼓を大人が担当する。初回は太鼓やバチの扱いから始め、打ち方を指導する。山車に登る子どもは三人ずつであるため指導も三人ずつおこない、指導者の合図で、演者は二〜三分で後ろの演者と交代する。

若戎車

練習場所は明徳公民館である。

演者は公募制であるが、他方、明郷小学校「お囃子クラブ」なるクラブ活動で日常的に練習している経験者もいる。山車は伊奈波神社の所有であり、囃子も本来は明徳小学校の子どもたちだけで演じていたが、最近では小学校が本郷小学校と合併したため、本郷地区の者もいる。指導者は明徳

地区在住の邦楽演奏家・小野崎隆賢氏ら三名で、締め太鼓と鼓は子ども、笛は大人が担当する。パート練習と合わせ練習の二部構成である。

宵宮が終わってから歌う岐阜民謡「おぼば」も練習する。

清影車

練習場所は本覚寺である。

演者は輪番制である。当初は輪番の組も七つあったが、現在は子どもの減少によって六つになった。清影車からくり保存会の指導で、締め太鼓と大太鼓を子どもが担当し、笛はCD（一部、生演奏も混ざる）を用いる。一回の稽古を二分し、前半を小学校低学年、後半を高学年の指導に充てている。高学年しか演奏できない演目もある。ここでも山車に登る子どもは三人ずつであるため指導も三人ずつおこなうが、交代のタイミングは子どもたち自身が覚える。

踊車

練習場所は河合銘木店である。

演者はボーイスカウト岐阜十六団の団員で、初心者と経験者の両方がいる。指導者はボーイスカウト団員の河合喜正氏で、締め太鼓と大太鼓を子どもが担当し、三味線はCD、時には指導者の笛が入る。締め太鼓は安宅車の後藤氏が調整を担当しており、それゆえか練習スタイルも安宅車と似ている。山車に登る子どもは三人ずつであるため指導も三人ずつおこない、次の演者への交代は自らが率先してする。本番は宵宮での曳行だけであるが、練習期間の終わり頃には、実際の曳行時間に合わせて、約四十五分の通し練習をおこなう。

(二) 神輿

木造町神輿

木造町の神輿については、最古の神輿の墨書に「宝暦（一七五一～一七六四）」とあるものの、その変遷は不明である。昭和二十二年（一九四七）、神輿を伊奈波神社へ奉芸した後、柳ヶ瀬へ繰り出したところ、他の神輿と遭遇して、騒動となり、神輿の上の鳳凰が折られてしまい、神輿の奉納は中止された。以後は展示のみがおこなわれたが、昭和六十三年（一九八八）の岐阜市制百周年を記念して木造町神輿（町内の人が担ぎ手となる神輿）を復活させた。

木造町は花神輿や獅子神輿も所有しており、これら三基は平成九年、岐阜市重要有形民俗文化財に指定された。平成二十三年、神輿の大修理がおこなわれた。

以下は、令和六年（二〇二四）四月六日の木造町の行事次第である。

八時一〇分頃	会所の設営が始まる。	一二時五二分	神輿に鳳凰、風鐸を取り付ける。
八時二〇分頃	神輿蔵の扉を開け、神輿を出す。	一二時二八分	飾り紐に鈴、白布、赤布を取り付ける。
八時三〇分	即得寺境内にて、神輿の飾り付けをおこなう。	一二時五九分	「木造町」の木札を取り付ける。
	神輿の掃除が終わると、鏡、瓔珞、御幣、提灯枠、提灯の順に飾り付ける。	一三時一九分	伊奈波神社のお札を、神輿の下から潜って内部に貼る。
九時三六分	神輿を会所に移動させる。	一三時三〇分	提灯を装着する。
一〇時〇七分	高張提灯を会所に取り付ける。	一三時四〇分	会所に盛り塩をして、お清めをする。
一〇時一三分	神輿に補助用担ぎ帽を装着する。	一三時四二分	電飾を準備する。
一〇時五二分	神輿にダテマキを取り付ける。	一四時二四分	提灯に電飾を装着する。
一一時一四分	鳳凰に羽根や電飾を取り付ける。	一六時二五分	電飾用バッテリーを装着する。
一一時四五分	実行委員長より挨拶があり、まつりの開始が告げられる。	一七時四四分	一同、集合する。
		一八時一〇分	出立式をおこなう。
		一八時二九分	電飾に灯火する。
		一八時三二分	神輿が町内の巡行を始める。木造町通を西に進む。
		一八時三五分	神輿が正興寺前で、一八〇度、旋回する。
		一八時三九分	神輿が会所前で、時計回りに三回、回転し、神輿は高く釣り上げられる。
		一九時〇五分	その後、担ぎ手は休憩する。
		一九時〇八分	神輿が移動を開始する。神輿の奉芸へと出発する。
		一九時一二分	高張提灯を先頭に、松阪響座和太鼓、ブラ提灯、リヤカーが同行する。
			神輿が矢島町一丁目交差点で、反時計回りに一回半、回転する。
			神輿がヴィライナバストリート前で、反時計回りに一回、回転する。
			その後、担ぎ手は休憩する。



一九時二一分 再出発する。

一九時二五分 神輿が伊奈波通一丁目交差点西の、松山新聞舗前で高く釣り上げられる。

一九時二八分 神輿が伊奈波通一丁目交差点で、時計回りに三回、回転する。

一九時三五分 神輿はアトリエの前で停止し、高く釣り上げられる。

一九時四四分 再出発する。

一九時四六分 神輿は伊奈波神社手前の交差点で停止する。

二〇時一五分 再出発する。

二〇時一九分 高張提灯を善光寺西にとどめ、神輿のみ、善光寺東坂を登る。神職の前で、神輿は時計回りに三回、回転し、その後、東坂を下る。

二〇時五四分 総練りをおこなう。

二〇時五八分 総練りが終わる。

二二時〇五分 他の神輿団体の代表者らと、修祓をし、お祓いを受ける。

二二時三七分 神輿は会所に向けて移動する。

二二時四六分 神輿が正興寺西交差点付近まで進み、一八〇度、旋回する。

会所到着後、会所前で、時計回りに三回、回転する。

二二時五一分 会所に入る。

二二時〇〇分 自治会長より挨拶があり、まつりの終わりが告げられる。

神輿連神輿

これは伊奈波神社の宵宮に出て来た神輿である。道三まつりには、平成三十年（二〇一八）で三十基の神輿が出た。そのうち宵宮に出場した神輿は、岐阜睦、ぎふ青年神輿、岐阜祭絆會、神輿愛好会、神加勢、岐阜心

女会の六基であった。この六基は伊奈波神社の前を練り込んでおり、ゆえに「岐阜まつりの神輿」に上げることができ、残り二十四基は除外される。一方、道三まつりには出ていないが、宵宮に出た神輿は、先の木造町の神輿以下、松阪太鼓、金華神輿の三基であった。

もちろんこれには年によって数の上下があることは否めない。また、コロナ禍が荒れた令和四年（二〇二二）には二基に過ぎなかった。

（三）からくり

山車が曳行される地区では、人形からくりが披露される。ただその場所が年によって異なることは、山車の巡行のところで述べた。また、人形の作り自体は第五章を参照されたい。ここでは各人形の収蔵場所と練習についてのみ、簡単に述べる。

からくり人形の収蔵場所は、三者とも伊奈波神社である。

安宅車は、安宅車奉曳実行委員会（担当になった自治会が設立）によって披露される。指導者は令和六年まで高森誠三氏である。三月中旬下旬ごろに伊奈波神社から稽古場所（近年は金華公民館）に輸送し、稽古をする。

若戎車は、岐阜若戎車奉曳会によって披露される。指導者はおらず、毎年同じメンバーが操る。三月中旬下旬ごろに伊奈波神社から明徳公民館に輸送し、稽古をする。

清影車は、清影車からくり保存会によって披露される。指導者は会長の後藤勝義氏で、三月下旬に伊奈波神社から本覚寺に輸送し、稽古する。

第四節 岐阜まつり協賛道三まつり

(一) 岐阜まつり協賛道三まつりの組織と目的

岐阜まつり協賛道三まつり（以下、道三まつり）は、毎年四月第一土、日曜日に開催される商業祭である。主催は道三まつり実行委員会、岐阜商工会議所、岐阜市商店街振興組合連合会、岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会、公益財団法人岐阜観光コンベンション協会、一般社団法人岐阜青年会議所、岐阜市自治会連絡協議会、岐阜市議会、岐阜市、岐阜市教育委員会によって組織されている。

道三まつりは、商業、観光、物産等の振興及び中心市街地を含めた地域の活性化を図り、並びに岐阜市を宣伝し、及び市民参加によるにぎわいを創出するために、岐阜まつりを共に盛り上げるイベントとして実施している（注1）。

(二) 道三まつりのはじまり

道三まつりの名称は、岐阜を代表する戦国武将の一人である斎藤道三に由来する。

昭和四十七年（一九七二）六月、司馬遼太郎原作の「国盗り物語」が翌年のNHK大河ドラマに決定すると、ドラマの舞台である岐阜市では、経済、観光を盛り上げるきっかけとすべく、岐阜城や常在寺、崇福寺など、ゆかりの地を巡る観光プランや作品にちなんだ土産品の製作など、様々な取り組みが行われた。そのような動きを背景として、翌四十八年二月三日、岐阜商工会議所と岐阜市観光協会が主催者となって、道三まつりを開催することを報道発表し、四月に初開催した。当時の主なイベントは、「斎藤道三公追悼法要」（平成十六年（二〇〇四）から斎藤道三公追悼式）、「七三年

式の自動車ショー」、「農具ショー」、「土産品まつり」、「民謡踊り大会」、「道三だいこ」など十数種にわたった（注2）。

二年目の昭和四十九年には、初めて若宮町四、五丁目に歩行者天国を設置し、野菜の即売会や日用品の廉売会、自動車ショーなどが開催された。以後、岐阜産業会館、大龍寺などで岐阜まつり協賛行事が開催されるなど、黎明期における道三まつりの規模は拡大していった（注3）。

(三) 神輿パレード

昭和五十一年（一九七六）の道三まつりでは、岐阜青年会議所が伊奈波神社の本神輿を担ぎだし、伊奈波神社から金神社、美江寺観音まで練り歩いた。この神輿は、昭和十五年に伊奈波神社が県社から国幣小社に昇格したことを記念に、伊奈波神社が市内の川村一郎氏から寄贈を受けたものである（注4）。この神輿は、当初例祭の時に氏子により担がれていたが、戦後担ぎ手の不足等により出されなくなったといわれており、二十年ぶりの練りこみとなった。この神輿の練りこみは、岐阜青年会議所が設立二十五周年を迎えるにあたり、「草の根文化を掘り起こそう」という活動方針のもと実施したものであるが、かつての岐阜まつりで岐阜市中心部だけでなく、加納、長良、早田など市内各地からもにぎにぎしく行われた神輿の練りこみに着想を得たものであった。

岐阜青年会議所は、伊奈波神社本神輿の練りこみを毎年続けていく一方で、市内のほかの団体にも参加を呼びかけ、昭和五十四年の道三まつりでは、本神輿十一基、子供みこし八十基あまりの参加を得た。これ以後、各団体によるみこしの練り歩きは、道三まつりのメインイベントとして位置づけられ、昭和五十五年に「神輿パレード」が始まった（注5）。これは、参加団体が伊奈波神社と金神社にわかれて練り歩き、「みこし広場」に集結



するものである。「みこし広場」は、若宮町交差点から徹明町交差点を十三時から十四時まで車両の通行を規制し、みこしの集結場所として設置された。この年、大人の神輿は二十数基、子どもみこしは百基余りが参加し、翌五十六年には大人神輿が前年の約二倍となる四十二基が参加し、「みこし広場」のエリアを美江寺町交差点まで北に延長し、開始地点を四か所に増やすなど、神輿パレードの規模がより一層拡充した。その後、たびたび出発点やパレードの規模などの変更があり、令和六年は、神輿パレードは金公園を出発地点とし、「神田町通3」交差点から「神田町5」交差点までの区間で実施された。

また、「みこし広場」以外にも、市内各地で子どもみこしが担がれるようになった。これは、岐阜市子ども会育成連合会の「まつりに積極的に参加させ、子どもたちに郷土を愛する気持ちを身につけさせよう」という考えのもと、大半の子ども会が実施したためである(注6)。

(四) 岐阜まつりへの影響

岐阜まつりを協賛する形で始まった道三まつりは、当初岐阜まつりの開催日である四月四日と五日に開催されていたが、平成八年(一九九六)から四月第一土・日曜日の開催に変更した。この年から、岐阜まつりの神幸祭と宵宮も四月第一土・日曜日におこなうこととなった。この日程変更は、前年の秋に道三まつり実行委員会から依頼があり、伊奈波神社が応えたものである(注7)。変更の背景には、人手や神輿・山車の担い手の確保、週休二日制による勤労・就学体制の変化が挙げられている。

また、平成二十年の神幸祭では、伊奈波神社の鳳輦が金神社から樞森神社に向かう途中で神輿パレード会場に徒歩で寄り、金神社、樞森神社の神輿とならんで三社合同の祭祀を実施することとなった(注8)。これも、岐

阜まつりの神幸祭や神輿パレードを盛り上げるため、パレードを担当するNPO法人ぎふ睦の依頼に応えたもので、以後、今日にいたるまで恒例となっている。加えて、翌二十年には岐阜市からの依頼を受け、芸妓団体による手古舞が三社の神輿練り歩きの先導を務めることとなり、以後も続いている。

以上のように、道三まつりが岐阜まつりのありように変化をもたらしたことがうかがえた。道三まつり開催以前にも、岐阜まつりの協賛事業として様々なイベントが開催されたが、岐阜まつりの在り方を変えるものでは無かった。単なる商業祭というだけにとどまらず、協賛している岐阜まつりに影響を及ぼしている点が、道三まつりの特徴の一つといえる。



写真 1-29 神輿パレードの中を行く神幸の行列
(令和五年四月一日)

(五) 現在の道三まつり

道三まつりは、昭和四十八年の開催以来、東日本大震災（平成二十三年）、新型コロナウイルス感染症拡大（令和二、三年（二〇二〇、二〇二一））により三度の中止を挟みながら現在まで続いている。

令和六年の第五十二回道三まつりでは、主催、協賛あわせて二十一の事業が開催された。このうち、神輿パレードでは十八団体がみこしを担いだ。当日に実施した参加団体への聞き取り調査（表1-1）によると、八団体がみこしに神社の御札を収めており、そのうち七団体が伊奈波、金、樫森神社いずれかの御札を入れていた。また、一般社団法人岐阜青年会議所は御札を入れていないが、祭り当日朝に伊奈波神社で木遣りを奉納している。前述のとおり、道三まつりは宗教と切り離れた商業祭であるが、神輿パレード参加者には岐阜まつりへの参加意識、もしくは伊奈波神社など岐阜まつりゆかりの神社への信仰心や氏子としての思いがみられる団体もあるといえる。令和六年四月三日に実施された神輿パレード説明会にて参加団体への配布資料のうち、「お約束事項」に以下の文言が記載されている。

神輿パレードは岐阜まつりに伴う催しです、御神幸は敬意をもってお迎えしてください。みこし広場ですれ違う際には事前には神輿を路肩に寄せ停止させて、鳴り物がある場合は音をださないでください。

この文章からも、岐阜まつりや神幸祭への敬意があらわれている。

(注)

(注1) 道三まつり実行委員会「概要―岐阜まつり協賛 道三まつり―」

<https://gifuomatsuri.jp/dousan/dousan-organization/>

(注2) 岐阜日日新聞 一九七三年二月四日朝刊

(注3) 岐阜日日新聞 一九七四年四月四日朝刊、一九七五年四月四日朝刊

(注4) 伊藤泰雄『神輿大好き 岐阜のまちに神輿が復活するまで』伊藤泰雄デザイン室 二〇一五年

(注5) 岐阜日日新聞 一九八〇年四月二日朝刊

(注6) 岐阜日日新聞 一九八二年三月二十八日朝刊

(注7) 伊奈波神社「責任役員会議事」一九九五年十一月三十日付

(注8) なお、金神社も当日に神幸祭を行っている。三社合同祭典終了後、黒岩神社と北野神社（千手堂と鍵屋西町を隔年）を渡御する。

(参考文献)

伊藤泰雄『神輿大好き 岐阜のまちに神輿が復活するまで』伊藤泰雄デザイン室 二〇一五年

寛 真理子「神幸祭と金神社・樫森神社」『伊奈波さん』平成二十四年七月号 伊奈波神社 二〇二二年

No.	参加団体名	神輿台数	神社御札
1	樫森神社 子供みこし	1	●
2	女神輿 岐阜心女	1	●
3	木之本まちづくり協議会	2	×
4	華陽子ども会・華陽ジュニアリーダー	1	×
5	株式会社 十六フィナンシャルグループ	2	×
6	シーシーエヌ 株式会社	1	×
7	岐阜信用金庫	2	●
8	岐阜市職員みこしパレード実行委員会	1	?
9	株式会社電算システム	1	×
10	株式会社 大垣共立銀行	2	●
11	ぎふ農業協同組合	1	×
12	岐阜商工信用組合	1	?
13	岐阜新聞社・岐阜放送グループ	1	●
14	長良西まちづくり協議会	1	●
15	一般社団法人 岐阜青年会議所	1	×
16	岐阜祭粋会	1	●
17	金神社神輿奉賛会 岐阜睦	1	●
18	日本南京玉すだれ協会	1	×
合 計		22	有：8 無：12 不明：2

表 1-1 みこしパレード参加団体と御札の有無（令和六年）



西暦	和暦	主要新聞記事、伊奈波神社記録要約（黒…岐阜まつり、赤…道三まつり）	主な出来事
1945	昭和 20		終戦
1947	22	戦後初の神輿渡御	
1950	25	この年の神幸祭ルート：伊奈波神社 — 樫森神社 — 金神社 — 伊奈波神社	
1957	32	この年の神幸祭ルート：伊奈波神社 — 樫森神社 — 金神社 — 赤口神社 — 伊奈波神社	
1958	33	神輿渡御で神主らは乗馬 38 年ぶり踊車曳行	
1959	34	この年の神幸祭ルート：伊奈波神社 — 樫森神社 — 金神社 — 伊奈波神社 初めて儀装車使用（鳳輦は台車に載せ牽引）	伊勢湾台風
1960	35	宵宮の山車は小熊町のみ、金屋町は 5 日展示 本町五丁目、湊町は台風により故障 初の発輦祭	
1961	36	宵宮は踊車のみ曳行される	
1962	37	岐阜まつり終了後、安宅車を伊奈波神社に献納 安宅車の山車蔵完成	
1963	38	宵宮で山車 2 台奉納	
1964	39	神幸祭ルート 初めて金神社 — 樫森神社の順に	
1966	41	宵宮 小熊町など 3 台の山車が曳かれる 手力雄神社の火祭りが岐阜まつり協賛行事として初出	
1967	42	宵宮 山車 4 台そろそろ	
1973	48	2 月に道三まつりの開催決定 第 1 回道三まつり開催	
1974	49	若宮町に歩行者天国設置	
1976	51	岐阜青年会議所によって伊奈波神社本神輿練り歩き	
1980	55	みこしパレード開催、みこし広場設置	
1982	57	樫森神社本神輿 54 年ぶり復活	
1985	60	安宅車からくり披露	
1988	63	踊車 曳行する団体が神賑会からボーイスカウトへ変更	
1989	平成元		平成改元
1992	4	若戎車からくり復元完成	
1995	7		阪神・淡路大震災
1996	8	例祭を除く岐阜まつりの日程が 4 月第 1 土曜日に開催するようになる	
1998	10	38 年ぶりに清影車からくり奉納	
1999	11	神幸祭において、若宮町の歩行者天国の区間のみ練り歩き	
2002	14	みこしパレード、この年から市役所、金公園出発	
2004	16	みこしパレード企画に NPO 法人ぎふ睦参加	
2008	20	神輿パレード内で伊奈波、金、樫森三社による合同祭典が始まる 岐阜芸妓組合が神輿パレードで三社神幸行列の先導役をつとめる	
2011	23	道三まつり中止	東日本大震災
2019	31		令和改元
2020	令和 2	道三まつり中止	新型コロナ流行
2021	3	道三まつり中止	新型コロナ流行
2022	4	駅前道三楽市を初めて設置（若宮町歩行者天国を廃止）	

表 1-2 戦後の岐阜まつり・道三まつり関係年表